南アルプスユネスコエコパーク 登録10周年 記念イベントを実施しました!

南アルプスユネスコエコパークは2014年にユネスコエコパークに登録され、2024年に10周年を迎えました。南アルプスユネスコエコパーク静岡地域連携協議会では10周年を記念し、6月8日に井川ビジターセンター、6月15日に青葉シンボルロードで記念イベントを開催しました。今回はそれぞれのイベントの様子をお伝えします。

南アルプスユネスコエコパーク登録10周年記念 オープニングセレモニー

6月8日に井川ビジターセンターにて、10周年記念イベントのオープニングイベントとして開催されました。当日は井川地域住民や静岡市内外から来訪客が訪れ、式典の参加や各種飲食店などを楽しみました。当日は静岡市長、川根本町長の挨拶から始まり、川根本町の赤石太鼓保存会による演奏も行われ、会場を沸かせました。記念講演は静岡大学の増澤武弘教授が南アルプスユネスコエコパークの登録から現在に至るまでの変遷について講演したほか、十山株式会社の鈴木康平代表取締役社長様による井川蒸溜所で製造されているウイスキーについての講演もありました。セレモニーの最後にはそのウイスキーのお披露目と乾杯があり、出席者が共に南アルプスユネスコエコパークの登録10周年を祝いました。

オープニングセレモニーの様子

赤石太鼓保存会による演奏

南アルプスユネスコエコパーク登録10周年記念 アニバーサリーイベント

6月15日に登録10周年を祝うとともに、南アルプスユネスコエコパークの認知度向上や新たなファン獲得のためのイベントとして青葉シンボルロードで開催されました。当日は静岡市長、川根本町長、早川町長の挨拶から始まり、各種トークショーや公演が行われました。

また、南アルプスユネスコエコパークの理念の元、静岡市と協働して南アルプスの生態系の保全と持続可能な利活用の調和を宣言する団体を募り、「南アルプスパートナーシップ宣言」を静岡市と宣言団体で締結しました。イベントでは本宣言の締結式やロゴマークの発表も行われました。パートナーシップ宣言団体の静岡聖光学院については、南アルプスのいまとこれからと題し、高校生目線で考えた南アルプスの保全と利活用についての考えと実践内容を発表しました。他にも川根本町のバックパックメーカー「hooper backpacks」の植田徹氏によるトークショーやニュージーランドの民族舞踊であるHAKAの公演、井川神楽保存会による井川神楽の演舞が行われ、来訪客を魅了しました。ステージイベントの最後は日本人初の8,000M峰全14座登頂達成者の竹内洋岳氏とトランスジャパンアルプスレース4連覇の望月将悟氏によるトークセッションも実施され、山岳の魅力と改めて南アルプスユネスコエコパークの魅力に気付かされた1日になりました。

竹内洋岳×望月将悟トークショー

井川在来作物やジビエなどの飲食店も多く軒を連ねた

南アルプス パートナーシップ宣言はじめました

南アルプスの「生態系の保全と持続可能な利活用の調和」をいっそう拡げるためには、「社会の大きな力」と「世界の大きな知」が集まり、つながることが必要です。南アルプスユネスコエコパーク登録10周年を契機とし、静岡市では南アルプスユネスコエコパークに関するに活動に、様々な形で「連携・共創」していく企業や団体を募りました。令和6年末現在、全3回の宣言式を通じて計20団体が南アルプスユネスコエコパークの保全と利活用のためのパートナーシップ宣言を静岡市と締結しました。11月23日、南アルプスユネスコエコパーク静岡地域連携協議会主催でパートナーシップ宣言締結団体を含む16団体42名で白樺荘周辺の清掃活動を実施しました。「南アルプスクリーン活動」と銘打ったこの活動では、白樺荘から約5km南アルプス公園線を南下した地点までの道路上や道路脇の清掃を実施しました。清掃の結果、正味80kgのゴミを回収し、適正に処分しました。清掃活動を通じて南アルプスユネスコエコパークの環境を保全するとともに、参加者同士が交流する機会を創出し、今後の南アルプスの利活用につながるきっかけになる活動になりました。

6/15のイベントでパートナーシップ宣言のロゴマークを発表

南アルプスクリーン活動の様子

南アルプスユネスコエコパーク登録10周年記念 大井川源流の碑設置プロジェクト

井川や川根本町を始めとして、静岡県を南北に貫く大井川、その源流がどこにあるかご存知ですか?

遥かに仰ぎ見る静岡県の最北部、南アルプスの間ノ岳(標高3190M)の直下でしみ出した最初の一滴、南アルプスから駿河湾に到る大井川の始まりの場所です。「南アルプスユネスコエコパーク登録10周年の節目に、より多くの人に南アルプスの魅力や恩恵を感じてもらいたい。」地元の思いから始まった大井川源流の碑設置プロジェクトは、多くの皆さんの力が結集して、現地への記念碑の設置を果たしました。今回のいかわね新聞では、設置までの道のりをご紹介します。

記念碑の制作

銘板徒歩リレー

記念碑の銘板を大井川河口の吉田町水防公園から、南アルプスの登山口である椹島まで、総勢127人のボランティアの皆さんが、3日間に及ぶ道のりをリレー形式で運搬しました。椹島へ到達した銘板は、登山熟練者に引き継がれ、源流に到達しました。

運搬登山ボランティア

記念碑の運搬は、たくさんの方々に関わっていただけるようにヘリコプター等によらず人の手で行うこととなりました。そのために記念碑は、分割と組立が可能で、南アルプスの雪崩等にも耐えられるようコンクリートで制作されました。制作には、井川小中学校の生徒の皆さんも参加しました。

銘板以外の記念碑の部材である基礎や台座は、山梨県側から33人の運搬登山ボランティア(ポックナリーア)の皆さんと運搬しました。

記念碑の設置施工

急な荒天や、予測のつかない天候に翻弄されながらも、現地にて、資機材が到着し、専門の技術者の手で、間ノ岳直下の大井川の源流部に記念碑が設置されました。

協力と協賛

プロジェクトの実施に必要となる費用や労力を賄うため、50者を超える企業、団体、個人の皆さんに協力と協賛をいただきました。協力いただいた皆さんのお名前と、このプロジェクトの概要を記録した看板が椹島に設置され、これから南アルプスを訪れる多くの方々にこの地域の魅力や協働の軌跡を伝えていくことになります。

南アルプスの恵みを未来へ、一緒に

南アルプスから駿河湾まで、大井川を軸に生まれる自然や人のつながり、皆さんはどのような未来を思い描かれますか?

いかわねを支える力

十山株式会社 平井岳志

Q どんな企業?

こんにちは、"Sharing the Alps"十山株式会社です。弊社は、井川地域や川根本町の更に奥、南アルプス大井川源流をフィールドにより多くの皆さまと一緒に南アルプスを楽しむ事業活動を展開しています。

130年以上前から山手線4つ分(2,430haとされる広大な南アルプスの社有林を管理し、現在は井川蒸溜所にウイスキーの製造・販売に注力。今後は持続的な森づくりにつながる体験型の観光事業も進めていきます。

Q いかわねに対する思いをお聞かせください。

2024年6月、南アルプスユネスコエコパークは登録10周年を迎え、南アルプスを盛り上げるイベントが各地で開催されました。

そして、南アルプスを愛する人の繋がりはますます強いものへと変わってきたと感じます。いかわね地域は、南アルプスを守り活かす共生の場として、引き続き大きな役割があると考えます。その地域の関係人口を増やしファンを増やすことが弊社の使命でもあります。十山として、歴史も実績もまだありませんが、いかわねと大井川流域全体の魅力を発信し、ブランディングしていく取り組みをしていきたいです。

Q 企業として今後の展望やいかわね地域で関わりたいことを教えてください。

いかわね地域と弊社大井川源流部は大井川でつながっています。また、流域の市町とも大井川でつながっています。南アルプスの恵みを分かち合い、新しい価値づくりをご一緒したいです。モノ・コトトキ・イミなど提供できる価値はアイデアつでもあります。少し古いWordですが、ここでしか体験できない「食う・寝る・遊ぶ」を開発し、広域を周遊できる観光ツアーを企画していきたいです。その際には、ぜひ井川蒸溜所のシングルモルトウイスキーを採用いただきたいと思います。

Q いかわね地域には、どのようなことを期待していますか?

地域の皆さま、いかわねの歴史、文化、食材、人材などなど、ぜひご紹介いただきたいです。些細な繋がりが、新しい価値を創造できるかもしれません。お気軽にお声がけください!

Q いかわね地域の住民の方へのメッセージをお願いします。

井川蒸溜所として、初のシングルモルトをリリースさせていただきました。地域の皆さんにはぜひ飲んでいただきたいです。また、より多くの方とコミュニケーションを取らせていただき、何より「楽しく」地域のことを一緒に考えていければ幸いです。今後ともよろしくお願いいたします。

ご協力ありがとうございました!

地域おこし協力隊 座談会

いかわね新聞第18号ぶり。いかわねの地域おこし協力隊の皆さんにインタビューを行いました。

自己紹介

渡辺実優(わたなべみゆ)以下 渡辺):で。川根本町観光交流課で地域の観光情報をPRをしています。

藤田昌永(ふじたまさひさ)以下 藤田):です。エコティかわねでエコツーリズムのツアーガイドや事務補佐をしています。

金原みつみ(以下 金原):です。井川の食べ物の仕事と井川のイベントに関わっています。

いかわねに移住したきっかけは

渡辺 大学時代、研究の一環で川根のまちづくりに関わることがあり、そのことをきっかけにこの地域に関わりたいと思うようになり移住しました。

藤田 小さい子供が居り、生活環境を考えた時に自然豊かな暮らしをさせてあげたいと思い移住しました。地域おこし協力隊の募集があることを知ってから2週間で応募しました。

金原 東京に暮らしていましたが、テレビで地域おこし協力隊のことを知り、インターネットで早速調べました。地域おこし協力隊の募集要項に載っていた井川の資源(在来作物)にとても魅力を感じ、自分が持っているスキルが最大限に活かせるのではないかと思い移住しました。(地域おこし協力隊に応募するまでの心境は皆さん違うようで…)

渡辺 応募するときに募集要項は見比べなかったな。

藤田 僕は他の市町村と見比べましたね(笑)

金原 もう見比べずに即決しました(笑)

左から 渡辺さん、金原さん、藤田さん

これ頑張ったなーと思う活動

渡辺 狩猟ツアーです。狩猟ツアーは1日目にくくりわなのやりかたを学んでもらい、2日目にジビエ肉ができるまでの過程を体験してもらいます。教えてくれる南アルプスジビエ牧場の猟師の殿岡さんは仙人のような感じで博識で…面白いなんです。地域の魅力のある人と訪れた人をつなげることができれば、狩猟の後継者や移住者を増やせるのではないかと思い企画させてもらいました。

金原 2つありまして、1つはYUKINCO(ゆきんこ)の企画です。井川のものを使ったお菓子を作りたいという相談があり、開発しました。継続的に地域の方が作れて、楽しんでもらえるように、作りやすく、材料は調達しやすいものにしました。もう1つは井川マウンテンマラソン。イベント会場の企画運営を毎年しました。出展者の募集やステージの運営、広告作り…。運営は毎年忙しかったですが、みんなで協力して運営できたのが達成感があり、うれしかったです。力になりたいと思ってくれる人が増えたのが分かりも良かったです。ぜひ、川根のイベントとも連携できればと思っています。

今後任期中にやっておきたいこと

藤田 発酵食や伝統食など、食文化を通じて地域の人の心も身体も健康にできるようなイベントを企画したいです。勿論こういったイベントを通じて観光客を呼び込むことも大切ですが、今住んでいる皆さんの暮らしの満足度も上げていきたいです。

移住してからの変化

渡辺 地域のことを考える機会が増えましたし、みんな挨拶してくれますし、みんな優しいからだと思います。

藤田 周りの山々や星がきれいで、移住してから遠くの景色や星空を眺める機会が増えました。

金原 地域の人が子供を可愛がってくれます。我が家に子供が生まれたことがきっかけで地域ともっと仲良くなれたし、接する人がもっと増えました。子は宝ということはこのことか!と認識できた気がします。地域ぐるみで助けてくれたのが本当にありがたい。地域が小さいからのメリットだと思います。

移住希望の人へのメッセージ

渡辺 移住してから後悔はありませんみんな地域の人がありになってくれるので、この地域を楽しむつもりで移住していただければと思います。

藤田 移住は緊張しましたが、周りの人が温かったです。少しの勇気があれば地域の方は受け入れてくれます。

金原 子育てするなら井川へどうぞ! 山奥で不便が多いと思われがちですが、地域ぐるみでみんなが見てくれます。自然も豊かですし、田舎暮らしに少しでも興味がある方はぜひお越しください。(ありがとうございました!)

第一回 いかわね会議

令和7年1月16日、17日の1泊2日で、ウッドハウスおろくぼ(川根本町水川)にて「いかわね会議」を開催しました。「いかわね会議」は、静岡市井川地区と川根本町=いかわね地域の若者(と行政職員)同士の交流の機会創出と、未来に向けたチャレンジの共有を目的に、南アルプスを未来につなぐ会(事務局=静岡県)が企画し、南アルプスみらい財団が運営を担いました。

ゲストには、持続可能な地域づくりの先駆者、古川理沙さん(鹿児島県姶良市)、牧大介さん(岡山県西粟倉村)のお二人をお招きしました。地域からは、井川地区9名、川根本町13名、行政機関・企業7名の合計29名の皆様に参画いただきました。本会では、「対話(交流)」を通して、日常の暮らしの中では、ゆっくり考えたり、誰かに話したりする機会が少ないであろう、「5年後の自身の未来像」や「未来の実現に向けたチャレンジ」を描くことをテーマに設定し、ワークショップ(と懇親会)を行いました。描いた未来像やチャレンジは、いかわね地図にマッピングして参加者全員で共有しました。一人ひとりが描く未来にたくさんの共鳴・共感が生まれたように感じています。

会議後、SNSにグループが立ち上がったり、企画案ができたりと、未来につながるコミュニティやチャレンジの火を灯すことができました。今後、「いかわね会議」を継続・発展させるとともに、協働で実施するチャレンジへの着手も考えていきたいと思います。火は、育てなければすぐに消えてしまいます。また、今回の参加者以外にも、地域には、熱い思い(火種)を持った方がたくさんいらっしゃいます。引き続き、いかわね地域の皆様のご参画とご指導を賜りますようお願いいたします。

牧大介さん

古川理沙さん

未来を描くワークショップ

チャレンジ地図の共有